

博士学位論文(経済学)

低開発地域の情報化と市場経済の発展 -韓国と台湾の歴史的経験-

東京大学大学院経済学研究科

博士課程3年 097027

李 昌玟

0. 博論の概要

- 本論文の目的

低開発地域の情報化過程とそれが促す市場経済の発展について歴史的な考察を行うことである。具体的には、電信・電話といった電気通信を基盤とする情報化が、19世紀末から20世紀半ばにかけての台湾と韓国でいかに展開され、それがまた同地域の市場経済の発展にいかなる影響を与えたのかについて分析を行う。

- 課題 1

かつて低開発地域の情報化過程を分析し、長期間にわたる持続的の情報化を実現する原動力を探り、そこから現在の低開発地域の情報化に対する政策的含意を提示すること。

- 課題 2

電信・電話という電気通信を基盤とする情報化が、台湾と韓国の市場経済の発展にいかなる影響を与えたのかを明らかにすること。

0. 博論の概要

・分析視角と構成

1. 政府主導の情報化

第1部 政府主導の情報化

第1章 台湾総督府による情報化の開始 [台湾]

第2章 朝鮮総督府による情報化の開始 [韓国]

2. 情報化主体の変化

第2部 情報化主体の変化

第3章 3等郵便局の発展と加入・市外電話の時代 [台湾]

第4章 電信架設運動と請願・寄付電信施設 [韓国]

3. 情報化と市場経済の発展

第3部 情報化と市場経済の発展

第5章 台湾糖の取引制度の変化と糖商の対応 [台湾]

第6章 朝鮮米の取引制度の変化と米穀商の対応 [韓国]

0. 博論の概要

・結論

1. 持続可能な情報化を実現するためには？

民間部門をコーディネーション能力の向上とそれを支える適切な政府の役割が必要である。最適な政府の役割とは、固定的なものではなく、特定の発展と歴史的な条件の下で民間部門との相互作用のなかから現れる動的な均衡として理解しなければならない。

2. 台湾糖と朝鮮米の取引制度をめぐる歴史的な疑問に答える。

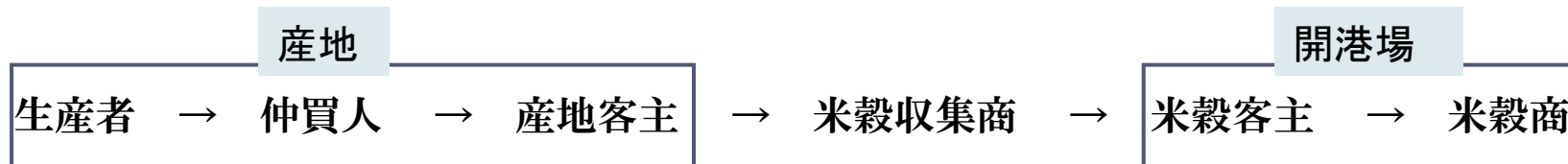
日本系糖商が欧米系糖商を追い払うことができた理由は、1880年代末から始まった糖商の手数料商人化にある。そして、この糖商の手数料商人化をもたらした決定的な要因は、台湾を世界市場に結び付けた電信線の登場である。

1890年代まで米穀客主業が繁盛した理由は、米穀商と米穀客主の間で結んでいた米穀契約が、米穀客主に流通利益を取らせるインセンティブ契約であったためである。1900~10年代にかけて電信・電話を利用した米穀取引が定着すると、伝統的な米穀客主業は消滅し始め、流通・加工・貿易過程の垂直統合化を図った米穀商が成長を成し遂げた。

第6章 朝鮮米の取引制度の変化と米穀商の対応

1. 問題意識

- **Open Economy** (1870~80年代)
 - 開港 (1876年釜山、1880年元山、1883年仁川)
 - 1890年代に朝鮮米の対日輸出が急増
 - 米穀客主業を営んでいた朝鮮人の客主商人が米穀の流通を掌握



- **Free Trade Area** (1900~10年代)
 - Colonization(1905年保護国、1910年併合)
 - 1913年に朝鮮米に対する関税撤廃、大量輸出時代
 - 米穀客主業の衰退と米穀商の成長

第6章 朝鮮米の取引制度の変化と米穀商の対応

1. 問題意識

- 米穀取引制度の変化
なぜ米穀客主は衰退したのか？（なぜ米穀商人は成長したのか？）
- 近代移行期（日露戦後から第1次大戦期まで）のさまざまな変化
 - （土地調査事業の完了）私有財産権の確立
 - 近代的民法と商法の導入
 - 近代的銀行制度と貨幣・財政整理
 - 近代的交通・通信網の整備 ←注目
- 電気通信（電信・電話）と米穀取引制度
電気通信を基盤とする情報化が、米穀取引制度に変化をもたらし、市場参加者の最適行動にも影響を及ぼす。

第6章 朝鮮米の取引制度の変化と米穀商の対応

1. 問題意識

- 本章の目的

前近代社会（朝鮮王朝）が近代社会（植民地朝鮮）へ移行する際に、技術革新（通信革命）によって経済取引（米穀取引）がいかに変化し、それがいかなる結果（米穀客主業の消滅と米穀商の成長）をもたらしたのかについて考察することである。

第6章 朝鮮米の取引制度の変化と米穀商の対応

2. 史実 (historical facts) と誤認 (misunderstandings)

① 歴史的事実

1890年代まで輸出朝鮮米の流通は米穀客主が、貿易は米穀商が担当

1900～10年代に米穀客主の勢力が衰退し、生産組織化した米穀商が流通分野にまで進出

1920年代以降、輸出朝鮮米の流通・加工・貿易を掌握した米穀商が戦前朝鮮の代表的な資本家として成長

② 誤った認識

日本帝国主義による貨幣・財政整理が民族資本（朝鮮人客主）の金融基盤に甚大な打撃を与え、さらに交通・通信網の近代化が日本商の内陸進出に有利に作用したため、日本人流通ルート（日本人行商－米穀商）が朝鮮人流通ルート（朝鮮人客主－米穀商）を駆逐した。

第6章 朝鮮米の取引制度の変化と米穀商の対応

2. 史実 (historical facts) と誤認 (misunderstandings)

・Puzzle

① 貨幣・財政整理と交通・通信網の近代化が米穀客主に打撃を与えた？

米穀商の成長は説明できない。

(1920年代から) 朝鮮人米穀商が日本人米穀商より圧倒的に多い。

② 日本商流通ルート (日本人行商－米穀商) が、朝鮮商流通ルート (朝鮮人客主－米穀商) を駆逐した？

米穀受託買取契約においては、相手が日本人であれ朝鮮人であれ、米穀商と仲買人 (日本人行商、朝鮮人客主) の関係は、プリンシパル－エージェントに他ならない。

第6章 朝鮮米の取引制度の変化と米穀商の対応

3. 米穀契約の理論モデル

・米穀商 (merchant) と仲買人(agent)の報酬関数

$$(1) \pi_a = \alpha \theta M(e_a, l) + \beta$$

$$(2) \pi_m = N[(1 - \alpha) \theta M(e_a, l) - \beta] + \theta m(e_m, L - Nl)$$

・契約形態

① 純粹手数料方式 $\alpha = 0, \beta > 0$

② 資金前貸方式 $\alpha = 1, \beta < 0$

π_a 仲買人の利潤

π_m 米穀商の利潤

M 流通利潤

m 仲買人を介しない流通利潤

N 仲買人数

θ リスクを表すファクト

e_a 仲買人の努力水準

e_m 米穀商の努力水準

α シェアリングレート

β 手数料 ($\beta > 0$) または貸出資金の利子 ($\beta < 0$)

l 米穀商から借り入れた米穀買付資金

L 米穀買付資金の総額

第6章 朝鮮米の取引制度の変化と米穀商の対応

3. 米穀契約の理論モデル

- unenforceable contract (仲買人の行動観察が不可能)

$$\begin{aligned} \max_{\{\alpha, \beta, l, N, em\}} & \quad Eu[N\{(1-\alpha) \theta M(ea(\alpha, \beta, l), l) - \beta\} + \theta m(em, L - Nl), em] \\ \text{s.t.} & \quad EU[\alpha \theta M(ea(\alpha, \beta, l), l) - \beta, ea(\alpha, \beta, l)] = \bar{U} \end{aligned}$$

リスクに対する態度と関係なく、最適契約は資金前貸方式

- enforceable contract (仲買人の行動観察が可能)

$$\begin{aligned} \max_{\{\alpha, \beta, l, ea, N, em\}} & \quad Eu[N\{(1-\alpha) \theta M(ea, l) - \beta\} + \theta m(em, L - Nl), em] \\ \text{s.t.} & \quad EU[\alpha \theta M(ea, l) - \beta, ea] = \bar{U} \end{aligned}$$

リスク中立的な米穀商、リスク回避的な仲買人 → 単純手数料方式

リスク回避的な米穀商、リスク中立的な仲買人 → 資金前貸方式

リスク回避的な米穀商と仲買人 → 流通マージンをシェアする契約

仲買人の行動観察が不可能 → 最適契約は「資金前貸方式」
仲買人の行動観察が可能 → 最適契約は「単純手数料方式」

第6章 朝鮮米の取引制度の変化と米穀商の対応

4. 1890年代に米穀客主業が繁盛した理由

- ・米穀客主業の利潤はどこからくるのか？

これまでは、

開港場まで米穀を運び込む朝鮮人米穀収集商と輸出を担当する日本人米穀商との売買を調停し、その対価として受け取る口銭が米穀客主業の主たる収益原である。

→米穀客主業の利潤は手数料 (β)、流通利潤からの取り分 (α) は考慮しない。
しかし、米穀客主業の利潤は、 β よりむしろ α が重要

- ・米穀商と米穀客主の間における取引方式

－居買（金融関係無）

米穀商が米穀客主の米店で取引する方式

米穀客主は事前に依頼された受託収集契約または当日購買に応じて米穀を委託販売

－先貸買（金融関係有）

理論モデルでの資金前貸方式と完全に合致する契約形態

米穀商が米穀客主に米穀買付資金を先貸しし、後で米穀と引き換える取引方式

第6章 朝鮮米の取引制度の変化と米穀商の対応

4. 1890年代に米穀客主業が繁盛した理由

居買の特徴

- 米穀商は基本的に米穀客主が提示する価格条件を受容する立場（price taker）
内陸の朝鮮人米穀収集商と開港場の日本人米穀商の間には様々な取引費用が存在
売買両者は米穀客主のいいなりにならざるを得ない。

→米穀客主は価格決定の主導権を握り、売買において全権を行使

- 米穀客主は購買と販売の時間的な不一致を利用（arbitrage）
米穀商の受託収集注文に直ちに応じず、米価変動を見ながら有利な時点で取引

→米穀客主は自己勘定の下で取引を行う独立的な営業者

- 米穀客主の主な収入源は手数料（ β ）ではなく、流通利潤（ α ）

米穀客主の手数料は取引金額の1~2%程度、これは朝鮮後期よりむしろ低い水準
他方、輸出穀物の価格は開港場と産地の間に16~46%の開きがある。

第6章 朝鮮米の取引制度の変化と米穀商の対応

4. 1890年代に米穀客主業が繁盛した理由

先貸買の特徴

- ・米穀客主に流通利潤を取らせるインセンティブ契約

米穀商の利潤は米穀客主に対する買付資金の貸出利子に他ならない。

貸出期間はおよそ1か月が一般的で、4か月を超えるものはごく稀であった。

当時の交通・通信事情を勘案した場合、1か月という貸出期間は短い。

→米穀商の貸付目的は米穀収集だけではない。

- ・『日案』1888-1904年(奎18120)、『日照』1893-1902年(奎18144)

米穀商の貸付目的は利子収入、価格条件より利子率条件が重視された。

米穀買付資金の貸付利子率は月3~7%が一般的

第一銀行朝鮮支店の貸付金利が月1%未満、日本人同士の貸付利子率月2~3%

→米穀買付資金の貸付利子率は非常に高い水準

第6章 朝鮮米の取引制度の変化と米穀商の対応

4. 1890年代に米穀客主業が繁盛した理由

- ・理論との比較

- ①契約の形式（金融関係の有無）から

単純手数料方式 \doteq 居買

資金前貸方式 \doteq 先貸買

- ②契約の内容から

単純手数料方式 ($\alpha=0, \beta>0$)

資金前貸方式 ($\alpha=1, \beta<0$) \doteq 先貸買 ($\alpha=1, \beta<0$)

\doteq 居買 ($\alpha=1, \beta>0$)

- ・米穀客主は近代的意味の仲買人とは異なる存在であり、
米穀客主業は情報非対称性を前提に成り立つ業種である。

第6章 朝鮮米の取引制度の変化と米穀商の対応

5. 通信革命と米穀客主業の衰退

米穀商と米穀客主の間における情報非対称性の問題は、1905年から第1次大戦期にかけて画期的に改善される。

① 大北電信会社が1883年に呼子－釜山間の海底線を敷設

：翌年から釜山－東京間の和文電報が開始

→（象徴的意味）朝鮮半島が世界市場につながる。

② 日露戦後から進展した朝鮮半島の情報化

：1906～15年の10年間、朝鮮総督府逓信局の積極的な公共投資

電信施設、35か所 → 600か所以上

電話通話施設、1か所 → 500か所近くまで急増

→（経済的意味）朝鮮と日本の市場統合度が高まる、米価のリンク

第6章 朝鮮米の取引制度の変化と米穀商の対応

5. 通信革命と米穀客主業の衰退

- ・米穀取引制度の変化

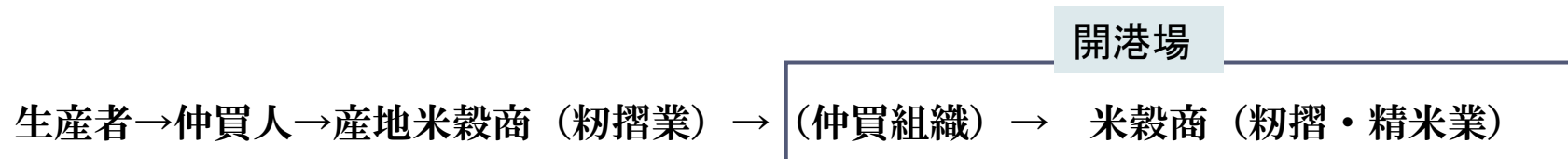
- ①米穀取引に電信・電話の導入

市場参加者は誰でも市況情報を瞬時に入手することができる。

従来のように米穀商が米穀客主の私的情報に頼ることはなくなる。

- ②米穀商同士が電信・電話を利用して取引を行う。

米穀客主をはじめとする仲買人の必要性自体が減少



第6章 朝鮮米の取引制度の変化と米穀商の対応

5. 通信革命と米穀客主業の衰退

- 米穀客主業を営む米穀客主は消滅

各会社や商店の営業目的欄に登場していた「客主業」は著しく減っていく。

仲買人の業務は文字通りの米穀取引仲介となり、純粹手数料方式が定着

→米穀商の専属仲買人 ($\alpha=0, \beta>0$) が登場

- 米穀客主の変容

①米穀商へ変身

名前		開始時期		開始時期	経歴	
沈能徳	客主業	(1888年)	→	粳摺業、米穀貿易業	(不明)	客主団合所評議員、商業会議所常議員
河相勳	客主業	(父河雲起)	→	米穀貿易業	(1914年)	普昌学校教師
崔應三	客主業	(1897年)	→	粳摺業	(1915年)	客主団合所所長、仁川商業会議所常務委員
金善奎	客主業	(1886年)	→	粳摺業、米穀仲買業	(不明)	奥田貞次郎の通訳
具昌祖	客主業	(1894年)	→	精米業、米穀貿易業	(1903年)	
金秉林	客主業	(1896年)	→	米穀仲買業	(不明)	勸業所調査委員
全文和	客主業	(1891年)	→	粳摺業、米穀仲買業	(1911年)	商業会議所評議員、米穀組合副組合長
張世益	客主業	(1886年)	→	精米業	(1912年)	朝鮮人商業会議所評議員

②仲買人（仲買組織） ← 電信・電話による直取引が定着してからは？

第6章 朝鮮米の取引制度の変化と米穀商の対応

5. 通信革命と米穀客主業の衰退

- ・新しい取引コストの発生とビジネスチャンス

- ①通信コストの増大

高額な通信費用が発生

仲買組織を利用すれば、情報収集にかかるコストを節約することができる。

- ②匿名取引の一般化によるコストが増大

前近代社会の米穀取引は長期的な信用関係に基づいた非匿名取引

契約不履行（到着遅延、重量不足、等級詐欺）による取引コストが増加

仲買組織が契約内容を保証することで解決できる。

第6章 朝鮮米の取引制度の変化と米穀商の対応

6. 米穀取引における通信需要

仁川の電信利用状況（1933年現在）

（単位：％）

項目	発信電報	着信電報
米取引関連電報		
期米取引	38	32
正米仲介	20	16
精米取引	16	13
計	74	61
船舶運送	9	7
商工業	8	18
官庁	7	12
銀行業	2	2
計	100	100

資料) 『朝鮮通信協会雑誌』 1933年11月号。

第6章 朝鮮米の取引制度の変化と米穀商の対応

6. 米穀取引における通信需要（市場取引）

・ 期米取引

仁川取引所では定期取引の対象となる米を「期米」と呼び、現物受渡しの期限までに転売と買い戻しが行われ、その差金のみを決済する清算取引が行われた。

・ 正米仲介

群山、木浦、大邱、釜山、鎮南浦などの米穀取引所では、取引対象となる米を「正米」と呼び、転売と売り戻しが可能な延取引が行われた。

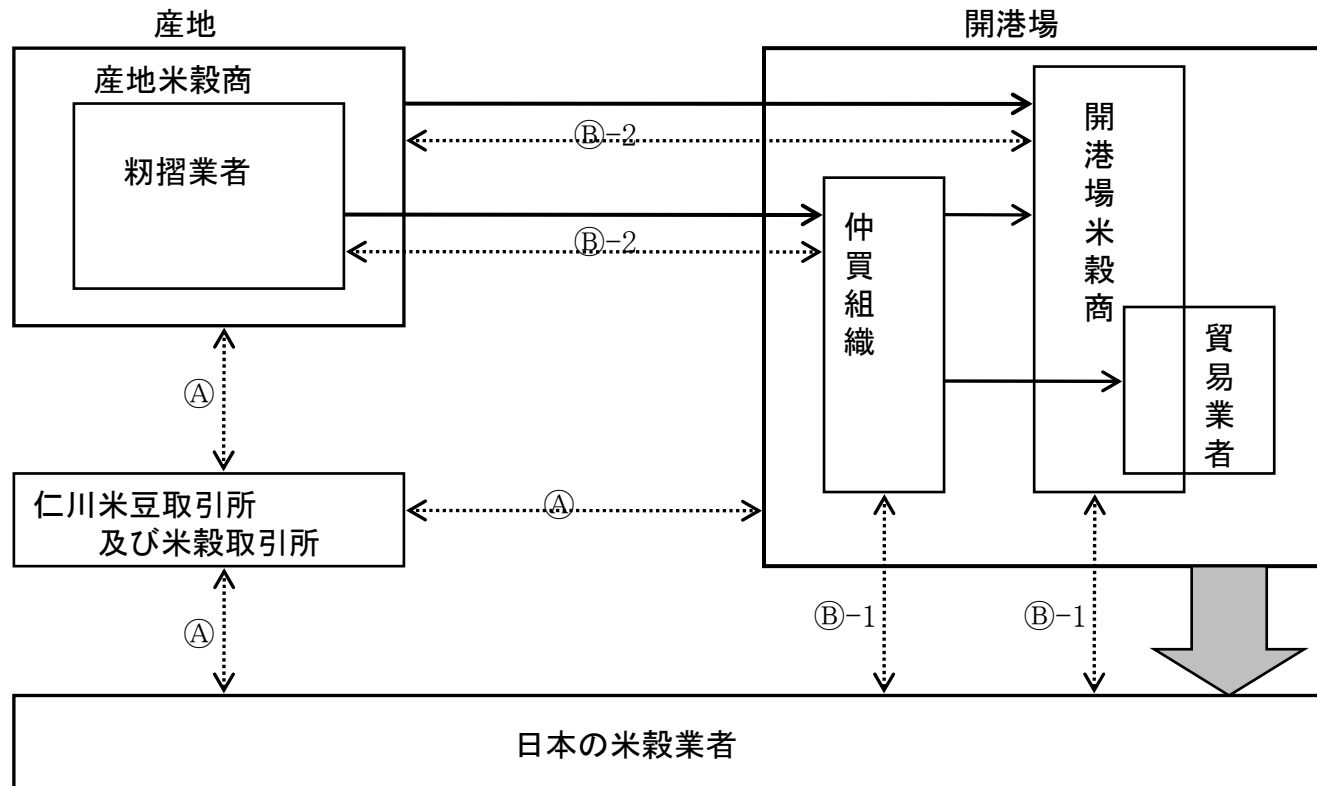
・ 米穀取引所の機能と利用目的

- ①実物市場に先行する形で標準価格を形成 → 価格察知
- ②価格変動によるリスクを回避するヘッジ機能 → 保険つなぎ活動
- ③価格変動を利用して利益を上げ得る米穀投機 → 資産運用機能

一米穀取引所は仁川、釜山、木浦、群山、鎮南浦などの主要輸出港に位置していたため、全国に散在する米穀業者が物理的な距離を克服して不便なく取引所を利用するには、電信・電話が重要な役割を果たしていた。

第6章 朝鮮米の取引制度の変化と米穀商の対応

6. 米穀取引における通信需要（場外取引）



第6章 朝鮮米の取引制度の変化と米穀商の対応

6. 米穀取引における通信需要（場外取引）

- ・ ③米穀商同士の取引（電信基準）

売買両者は、買い手または売り手を求めて照会電報を送る。

照会電報を受けた相手方は返電し、このようなやり取りが数回行われる。

売買両者の意思が合致すれば商談は成立し、売約証と買約証を交換捺印し送付すれば契約は完了。

- ・ 電文に残る時刻は、売買両者によるtime inconsistencyを防ぐ装置

米価変動が激しいときは、電報による交渉中にも売買両者の態度（最適行動）が何度も変わり、それはしばしば紛争にまでつながる。

電文に表示される時刻を契約の基準とする。

第6章 朝鮮米の取引制度の変化と米穀商の対応

7. おわりに

- ・ 1890年代に米穀客主業が繁盛した理由は？

(前近代社会の) 米穀取引が情報非対称性の問題を抱えていたため、その契約形態は米穀客主に流通マージンを取らせるインセンティブ契約であった。

- ・ 電気通信を基盤とする情報化が、米穀取引制度に変化をもたらした。

産地と開港場（輸出港）の米穀商同士が直接につながる。

米穀商による取引の内部化が実現（専属仲買人の登場）

- ・ 近代的取引の定着によって米穀客主業は成り立たなくなる。

資本規模の大きい米穀客主は、自己売買を基本とする米穀商に転じた。

資本規模の小さい米穀客主は、仲買組織の会員として専門仲買人となった。

- ・ 専門仲買業の存在意義

通信コスト、匿名取引の拡大による契約不履行のコストが増大

新たなビジネスチャンスが生まれる。